

青梅市文化財ニュース

第341号

平成28年3月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

「のがみっばら」の昔と今

「野上原」と書いて、どのように読むか、河辺駅の北側一帯に住んでいる人たちの中でも、読める人が少なくなりました。漢字の地名は“のがみっばら”と読みます。

市内東部の野上地区は、JR 青梅線の河辺駅北東方から北側一帯で、古くからの中心地は霞川に沿う地区で、南東端は「わかぐさ公園」付近までの広い範囲でした。霞川に沿っては、それなりの収穫がある水田や畑地が広がっていたため、生活も比較的安定していましたが、霞川より南側に広がる畑地の土質は、保水が乏しいノッチ（野土）であるため、農作物の収穫に恵まれない土地です。青梅市内だけでなく、武蔵国では「農作物の収穫に恵まれない土地」は、一般に「ばら」と称しています。羽村では「ハムラッパラ」、あきる野市秋川では「アキルッパラ」です。

「……パラ」は、農作物の収穫に恵まれない土地ですから、人が住めるような土地ではありません。ここは収穫に恵まれないだけでなく、人々が生活するために必要不可欠の飲用水にも恵まれない土地です。青梅だけでなく、日本中のパラやハラと称される土地は、長い間、人々が生活する集落はもとより、往来する道路も少なく、まばらな樹木とススキなどの草木が自然に生育するだけの土地でした。

このような土地に、江戸時代の初期、最初に集落を成立させようと計画を立てたのは、当時、



大正12年頃の野上原付近

（六）は六万薬師（鈴）は鈴法寺跡（河）は河辺駅だが、当時はまだ開駅していなかった（桜）は新町桜株（春）は野上春日神社 破線は新青梅街道の位置 大正12年測図・大正15年4月30日発行、2.5万分の1地形図「青梅」図幅。（国土地理院）

野上村の西側にある下師岡村の名主であった吉野織部之助（?～1639）でした。織部之助は慶長16（1611）年に幕府の許可を受け、新町村の成立に尽力しました。しかしながら、農作物の収穫に恵まれないノッチであったため、開拓村への参加者には恵まれず、村らしくなったのは5年後の、元和2（1616）年春



になってからでした。村の名称は「新町村」でした。質素に成立した集落でしたが、将来、周辺の村々以上の繁栄した集落になることを期待して、織部之助は「町」と名付けたともいわれています。

開村の経過や村の経営については、『仁君開村記』・『新田屋敷割帳』・『惣百姓代々続名覚』・『御水帳表字附目録』として残されています。これらは東京都の文化財に指定されており、青梅市郷土博物館では、『仁君開村記』を市史史料集として刊行しています。

青梅街道の両側に沿って軒を並べた新町村の西端は、鈴法寺です。そこから古くからの集落である師岡へ向う道路は、“のがみっばら”を横切り、師岡追分に向っていました。藤橋から西方へ延びる町屋街道でも、大門交差点から師岡追分まで、一軒の家もありませんでした。師岡追分には、現在も道標が残されています。

右上のスケッチは、江戸時代後期に刊行された『御嶽菅笠』にある挿入画です。右端に描かれている建物は鈴法寺で、そこから先、師岡にある六万薬師堂まで、目印になるような建物や樹木などはありません。人々は約2kmの間、盛夏の日照りの下では大粒の汗を流し、あるいは厳冬の頃は北風に身を晒しながら、往来していたことでしょう。

表に記載した地形図は今から約90年前の、大正12年頃の状況を記録している図です。鈴法寺から六万薬師堂近くまで、家屋はまったくありません。青梅街道に沿ってあるのは、普通畑と桑畑だけでした。このような状況は、昭和45年頃まで続きました。

しかしながら、付近一帯は将来、首都圏の一部として大規模な発展が期待されることから、青梅市は都市計画を行い、土地区画整備組合を組織して開発を進めました。その結果、現在の立派な土地利用が行われるようになりました。このことの詳細については、『青梅市史』に詳しく述べられています。

（文責 角田清美）